今はまだ暗い場所で

市原市立千種中学校　三年　大須賀　みどり

突然先が見えなくなってしまった時、皆さんはどのような思いを抱えますか。

私には５歳年上の兄がいます。幼い頃の兄との記憶は、テレビチャンネルの取り合いなど、子供らしい喧嘩ばかりでした。

そんな兄との接し方が大きく変わったのは、私が小学三年生、兄が中学二年生の時でした。きっかけはお互いの心の成長にあったかもしれません。しかしもう一つ、何よりの原因となった出来事がありました。兄の「不登校」です。思い返せば、確かにあの頃の兄は学校を休むことが増えていました。でも、まさか自分の兄が不登校になるなんて考えもしませんでした。

不登校と戦う状況にある人や、過去にそのような経験をした人は、周りに自分のことを話すことが難しいと私は感じます。それは、不登校への偏見があるからです。「怠けている」「学校に通って当たり前」その偏見はインターネットやちょっとした会話から「不登校」と戦う人々に容易に届いてしまっています。

私たち家族はバラバラで、しっかりコミュニケーションを取ることができていませんでした。

家庭がそのような状況にあることで、必然的に私も孤独を感じていました。最初は、一日中部屋に籠り、周りに迷惑をかけている兄のことが妬ましく、嫌いだと感じてしまっていました。家の中は会話も笑顔も少なく、学校での出来事や世間話をすることも気が引けるほど、暗い雰囲気でした。その中で明るくいられるのは自分だけだと、私は勝手に大きな責任を背負っていました。その結果、私も心が沈んでしまう日が増えていきました。

このまま家族はどうなってしまうのだろうと不安が募る日々。

その日々が動き出し、今、我が家に会話と笑顔があるのがなぜか。

それは兄が状況を変えようと考え続けていたからです。ある時から兄は毎日ではなくとも、短い時間であっても、学校に足を運ぶようになりました。私たちは自分だけが戦っているような気持ちになっていましたが、兄は私たちの知らないところで独り、戦っていたのです。

皆さんに知っていただきたいことが二つあります。一つ目は「どの家庭でも突然不登校との戦いは起こりうる」ということ。二つ目は「不登校の子供とその家族は、何もしていないのではなく、今はまだ暗い場所で孤独に戦っている」ということです。もし身の回りで戦いが始まったとき、皆さんには一歩を踏み出そうとする心に寄り添って「待つ」という優しさを持っていてほしいです。

事態は必ず動き出します。それまでの日々は本当に長く苦しいものです。本人だけでなくその周りの人までも心の隔たりを感じて苦しみます。しかし、偏見が、戦う人々を傷つける言葉がなくなれば、きっと多くの人の戦いに光が差し込むはずです。

兄は今回の発表にすんなり賛成してくれました。私はいまだに、あの時の兄が何を考え、何を思い動き出したのかを知りません。それは深く知らなくてもいいと思えるほどに、日常を取り戻しつつあるからです。私たち家族はいまだ続く戦いの中で、同時に光も見ています。必ずこの戦いは終わると信じて。